

## 言語ゲームと法の概念

### 1、 序

- 本勉強会の目的
  - ① ウィトゲンシュタインの思想を、彼の考えの変遷をたどり理解する。
  - ② ①の視点からハートの法の概念を読み解く。
  
- 「亀がアキレスに語ったこと」

### 2、 ウィトゲンシュタインの思想と変遷

#### (i) 前期 : 写像理論

- 人生の意味や神の存在という哲学的問題への関心
  - どこまで有意味に語ることが出来るのか？

思考は言語によって営まれる。(思考できないものに対して思考することはできない。)  
→ 言語の限界を言語の内側から定めればよい。

- 言語の性質とは？
  - 世界を写し取ること。

言語	→	世界
命題	→	事実
要素命題	→	事態
名	→	対象

- ・ 絶対的な単純者としての名と、それから成る単純な（これ以上分析できない）要素命題。ゆえに、要素命題は互いに独立。
- ・ 要素命題は事態を記述し、命題は事実を写しとる。命題の総体である言語は事実の総体である世界を写しとる。
- ・ 事実と命題は写像形式（論理形式）を共有する。
- ・ 写像関係における一対一の完全な対応。

● 語りえぬもの

- ・ 言語によって表現されるもののみが世界
- ・ 超越論的な論理、超越的な倫理的事柄（＝神、善悪など世界の外側にあるもの）

「語りえぬものについては、沈黙せねばならない」

『論理哲学論考』

(ii) 中期 : 写像理論の綻び

● 要素命題は互いに独立か？

Ex. 「あの花は赤い」 → 白、黄、青…ではない！ 色の体系というモノサシが存在。

→ 語の体系によって対象や事実は切り取られる。

● 語の意味とは…

- ・ 文法（体系、規則の束）の中でその語が占める位置
- ・ 言語における語の使用こそが語の意味（意味の説明が求められた時に、意味が語られる） → cf. チェスというゲームの規則

● 主体の解体

- ・ 語を使う主体の問題 = 意味が一義的に決まらない。（実際とのズレ）
- 「私は歯が痛い」は「歯が痛い」という報告するゲームがあって意味を持っている。

(iii) 文法から言語ゲームへ

・ 言語ゲーム ?

- ① 我々の生き様、振る舞いの全てが、すでに何らかの言語ゲームである。
- ② 言語ゲームの外には出られない。（出ようとしても新たな言語ゲームを生み出すのみ）
- ③ ルールよりもゲームが先行する。論理学がルールを明記しても、ルールには絶対的な根拠は与えられない。
- ④ 言語ゲームは人が何かを信頼する場合にのみ可能である。知識の究極の根拠は承認にある。
- ⑤ ゲームは「家族的類似性」によってしか定義されない。

### 3、 言語ゲームから見る法

#### (i) H.L.A.ハートの法の概念

- ・ 法とは何か = 一次ルールと二次ルールの結合体
  
- 一次ルール（責務のルール）からなる原初社会の欠陥
- ① ルールの不確定性（何がルールか分からない）
- ② ルールの静的性質（ルールを変える手段が決まっていない）
- ③ ルールの非効率性（違反した場合の制裁が統一されない）
  
- 二次ルール
- ・ 承認のルール（①を補完）
- ・ 変更のルール（②を補完）
- ・ 裁定のルール（③を補完）

#### (ii) 言語ゲームからの再構築

ハートが捉えた法現象を、特殊なタイプの言語ゲームとして説明する。

- ゲームとルールの関係 — 表と裏
  
- ルールの結合 = ルールへの言及
- ・ 不可視の一次ルール = 規範（言及されなければ分からない）
- ・ 一次ルールを可視化する二次ルール（二次ルール自体は不可視）
  
- 草野球の例（法現象を言語ゲームで捉えるために）
- a) 審判のいないゲーム
- b) 審判のいるゲーム
  
- a) → b) で何が変化したのか？
- ・ 変化していない！（審判は記述する役割のみ）
- ・ 変化した！（審判のみがルールとなった）

→ ハートの立場 … 審判も元のルールに拘束されているが、さらに特別なルール（二次ルール）にも従う。

今までの考察をふまえると次のように言うことができる。a) → b)においては元のルールはそのままであるが、「審判を置くルール」と「意見が分かれるような場合は審判の判定に従うというルール」が加わった、‘新しいゲーム’が始まったのだ、と。

#### 4、 結語

- ・ ウィトゲンシュタインからハートへ、ハートからウィトゲンシュタインへのアプローチ
- ・ 言語ゲームと法概念から見える社会的ゲーム（ルール）

#### 【参考文献】

- ・ L.ウィトゲンシュタイン 野矢茂樹訳『論理哲学論考』（岩波文庫、2003）
- ・ 飯田隆 『現代思想の冒険者たち 07 ウィトゲンシュタイン — 言語の限界』（講談社、1997）
- ・ 鬼界彰夫『ウィトゲンシュタインはこう考えた』（講談社現代新書、2003）
- ・ 永井均『ウィトゲンシュタイン入門』（ちくま新書、1995）
- ・ 竹田青嗣・西研 [編]『はじめての哲学史』（有斐閣アルマ、1998）
- ・ H.L.A.ハート著 矢崎光圀 監訳『法概念』（みすず書房、1976）
- ・ 橋爪大三郎『言語ゲームと社会理論』（勁草書房、1985）
- ・ 橋爪大三郎『人間にとって法とは何か』（PHP 新書 2003）
- ・ 橋爪大三郎『橋爪大三郎コレクションⅢ 制度論』（勁草書房、1993）